



住み開き 2012→

どこが”道だった”のかもわからず、グーグルマップもあてにならない瓦礫や残骸だらけの暗闇の中で、友人の車の中で僕は揺られていた。突然窓に飛び込んでくる「街の中にそびえる」巨大な船。あまりの非日常的な光景に驚きと共に自然と言葉を失う。僕らはいつしか無言のまま、自衛隊の車両に挟まれながら、ただひたすらに暗闇を走っていた。

2011年3月に起きた東日本大震災が起きてから2ヶ月後の5月。”何としても早く被災地に向かいたい”しかし、混乱しているであろう”被災地の邪魔になってはいけない”そんな板挟みの感情と混乱していた情報の中で爆発しそうだった僕は岩手県大船渡市に実家のある方から”来ませんか？”と声をかけてもらう事で「ようやく」（個人的にはギリギリのタイミング）で友人たちと被災地へと向かっていた。



被災地へと向かう。とはいっても直接ボランティア活動に参加するわけでもなく、かといって何かしら被災地で役に立つ特別なスキルもなく、ただ実際に「知らなければ」と衝動的に手ぶらで向かった僕は、ただの野次馬と非難されても仕方がないとわかっていた。それでも。僕は何もわからず大阪の自宅で手をこまねいているよりは「自己責任でまずは現地に向かう」のが最善と判断したのだ。

そうして訪れた岩手県大船渡市、合流した来る事を誘ってくれた現地の方にまだ傷跡も生々しい被災場所を案内してもらいつつ、数日間、被災者の方々、レスキュー隊、そして全国各地から

集まってきていたボランティアの方々から様々な話を聞いた。

「日本のレスキュー犬だと”生きている人”は探せても”死んだ人”は探せないのです」悔しさと無力感を感じさせる表情で話してくれたレスキュー隊員、「この震災で全て失ったからこそ、全てを一から始める事に決めました」と淡々と悟ったように語る高齢の女性被災者、「人として正しいことをしなければと仕事を辞めてここに来ました」妙に生氣のあるキラキラした顔で話すボランティア。様々な喜怒哀楽と混乱が「非日常のその場所」には溢れていて、僕は名前をつける事ができずに、ただ混乱した気持ちになっていた。

そして「仕事という日常」に戻る為に、先に友人達と別れ仙台から新幹線で大阪へと一人帰る車内、被災地でのボランティア活動の帰りであろう隣席の女性達が現地での活動の様子や福島原発事故の噂話をあれこれと話すのをぼんやり聴きながら考えていた。

心苦しい気持ちはあったが、僕にはボランティアとして仕事や家庭の事情で「現地で直接的に関わり続ける事」を選択する事はできなかった。それでも「知ってしまった」からこそ「何かしなければ」と思った。

被災直後の3月にも友人と共同で「たくさんの人たちにとって、日常生活を過ごす中での被災地に向けての気軽なワンアクションとなれば」と大阪でチャリティーイベント「playfor (<https://namba.keizai.biz/headline/1745/>)」を主催したりしていたが、実際に訪れた後の今回も”まず出来る事”として「被災地での様子を話す報告会」を企画した。

ただ報告会で参加者に話しながら何となく違和感というか”もっともっと日常の中で出来る事があるのでは？でも何をしたらいいんだ？”行く前に自分の中で爆発しそうだった気持ちが、今度は無力感へと形を変えて僕を襲い始めていた。でも、答えはなかなか見つからず。苛立ちだけが僕の中に溢れ始めていた。

選択は「住み開き」

遅ればせながらの自己紹介にもなるが、僕は銀行で働きながらアートNPO輪音（わおん）プロジェクトを2007年に別に立ち上げ、主に若手アーティストの支援にも取り組んでいる。2011年当時はその流れで採用された大阪市のアートインフォメーション&サポートセンター中之島411の企画委員としても、同じく若手アーティスト支援の事業を担当していた。

その時に、同じ企画委員の一人として知り合いになったのが、当時”住居の一部をセミパブリックに開く”事を「住み開き」と名付けはじめて、実際に訪れるツアーイベントの開催やその様子をミニ冊子やWEB上に集めて紹介し発信していた「住み開き提唱者」こと、アサダワタル氏だった。

でもその当時の僕は「住み開き」ツアーにこそ何度か参加させていただいたものの”へえ～自宅で面白い事をしている人がこんなにいるんだ”と確かに興味深くは感じたが、同時に”でも、自分の家に見知らぬ人を呼ぶなんて、僕には絶対無理”と思っていた。（そもそも学生時代から含めても、友人を自宅に呼ぶ事に心理的な抵抗のある性分だった）

そんな僕がなぜ、後に何故24時間フルオープン「住み開き511」を始めたのか？と言えば、アサダワタル氏が2012年1月に発刊した「住み開き-家から始めるコミュニティ」をなんの気なしに読んでいた時に見つけた（うろ覚えだが）”東日本大震災の時に他のアーティスト達の家が避難所的役割を果たした”という一文を読んだのがきっかけだった。東北の被災地を訪れたものの、その後に結局は「何もできず」に無力感を感じていた僕が住んでいる大阪で「何をすべきか」その答えを見つけた気がしたのだ。

具体的には被災地を訪れた後”次に同じような自然災害があった時、そこまで特別ではなくても、何かしら日常生活において家族と喧嘩したり、終電を逃したりといったトラブルが起きた時の駆け込み寺「一時的な避難所」をつくれなだろうか？”と考えつくも、主に資金面で断念していたアイデアが（流石にその為に個人で物件を別に借りるのは厳しいと考えていた）”住み開き”という形なら実現できるのではないかと僕の中で結びついたのだ。

とはいえ、やはり自宅に知らない他人を呼ぶの嫌だ。という心理的抵抗は残った。しかし、何かしら「新しい物事を実現させる為には」自分も何かしら「新しく変わらなければ」と迷った挙句、最終的には僕なりの勇気を振り絞り覚悟を決めた。



丁度、うまい具合に大阪R不動産で梅田から徒歩圏内のアクセスの良い場所にある「部屋内部の階段で1Fと2Fを分ける事ができる」マンションを見つけ、契約する事もできた。

部屋をはじめて見学した時に、窓際から見える淀川の美しい景色を眺めながら”ああ、この場所なら1Fを住み開きスペースとして公開しつつ、2Fはプライベート空間に分けて”僕にとって”理想的な形で住み開きに挑戦できるかも？”そんな事を考え、やるぞと決意を新たにしたので覚えている。

「住み開き」をする為に淀川の河川敷すぐそばにあるマンションの「511号室」を借りる時、賃貸契約書に一文だけ追加で”わざと”お願いしたのが「壁を白く塗らせてもらう」という条件だった。

現実的に白壁が老朽化で黄ばんでしまっていたのも理由でもあったが、この閉じられた空間であるマンションの一室を外部に「住み開き」として開く事にチャレンジするなら、始める前からいっその事”わざと誰でも参加できる作業”を用意し、その様子を公開する事で「ひっこし作業」それ自体を「イベント化」できないか？そんな事を内心、考えていたからだ。

ソーシャルメディア上で「住み開きをはじめます！」と作業を手伝ってくれる人の募集を行い、約3ヶ月間にわたっての「ひっこし作業」という「イベント」が始まる。参加者全員で壁を順番に白く塗り始めるのと並行して、掃除から始まり、照明器具の設置、エアコンや洗濯機の手配（冷蔵庫は転居する友人から”それなら”と貰い受けた）などなど友人や呼びかけで集まった初対面の人との共同作業が続く。



一方で、覚悟こそ決めたものの、やはり”自分の住む家を知らない不特定の人に開く”という行為に対する”何かしらトラブルが起きたらどうしよう？”といった類の不安を僕は内心消しきる事ができなかった。その事を少しでも解消する為にシェアハウスを経営している友人や、ゲストハウスを運営している友人に足を運んでもらっては”大丈夫だろうか？どうしたらいいだろうか？”そんな相談も同時に「こっそり」していた。

こうして無事に一通りの準備作業が終わり、部屋が完成した後には、さらに友人達と何回か「住み開き」シュミレーション的なイベントを開催して僕自身の「住み開き」の実行イメージを確認

した後で、ついにこの511号室という場所にシンプルに（自分の部屋に別の名前をわざわざつける事が気はずかしかった面もある）「住み開き511」と名付け、WEBサイトも新しくオープンさせた。

そして2012年11月28日、遂に自宅もとい「住み開き511」のお披露目紹介を兼ねた初の住み開きイベント日を迎える。

”自宅でイベントなんてしても、だれか来るんだろうか？”

ワクワクという期待と、見ず知らずの他人がふらりと来るかもしれない緊張感の両方を紛らわす為に、必要以上に周囲に対して饒舌だった記憶があるが、そんな僕の懸念とは裏腹に面識の全然ない行政関係者や学生さんが多数訪れてくれた事には本当にびっくりした。

当日の、初めての対談ゲストは当然のように「住み開き提唱者」アサダワタル氏。彼の提唱する「住み開き」を始めるにあたり何となくケジメというか”はじめます”とことわりを事前にしておきたかったのと、「住み開き511」の活動で考えている「日常避難所」というコンセプトについて話す事で、様々な他の「住み開き」スペースを知っているアサダワタル氏からのアドバイスももらいたかったのだ。<https://www.youtube.com/watch?v=cbjbq12gYhk>

そして無事に「住み開き」1回目のイベントが終わり安堵した僕にアサダワタル氏から”しかし、住み開きを始める為に物件を借りるなんて、ここだけですよ”と半ば呆れた様な言葉をかけられた。（通常は既に所有している物件の空きスペースを使う場合が多いらしい）

僕なりの「住み開き」の解釈として、住んでいる住人それぞれの考えでそれぞれ「住み開き」を始める訳だから、画一化された同じような「住み開き」パターンはないだろうとは考えていたが、（むしろ同じだったらディストピア的な恐怖をそれはそれで感じる）ふと”そう言われれば、確かに変かもしれないな？”とイベントが終わり、誰もいなくなった部屋で一人、ふと可笑しく感じた。

それでも僕は例え”変”でも「住み開き」で「日常避難所」というアイデアを実現したかった。

慣れとは怖いもので「住み開き」初日にあんなに心配したり緊張していた事が嘘であったかの様に、毎日のようにイベントをして2、3ヶ月過ぎるとFacebookやTwitterなどのソーシャルメディアで募集し開催するイベント毎に自宅こと「住み開き511」へと様々な人が訪れてくるのが僕の当たり前前の日常になっていった。

そして余裕が出てくると、いわゆる僕自身が飲み屋の様な、ギャラリーの様な場所「アトリエ輪音」を別に運営していた経験があったからこそ比較して「住み開き」ならではのメリットが幾つか見えてきた。例えば自宅で開催する事での文字通りの「ホームアドバンテージ」。イベント毎に場所代を考慮しなくて良いので資金面、集客自体も特にプレッシャーを感じないし、何より片付けとか終電を気にしなくて良いのは有難かった。そして開催するイベントの内容自体も店舗や商業スペースとは違い、あくまで「住居」でもあるので、「制約なしのなんでも有り」にできるのも新鮮だった（もちろん、隣近所に迷惑をかけない範囲であるのは言うまでもない）

この何とも”やってみるとわかる”楽しさを「住み開き」に関心のある人に伝えたくて、きっかけ作りになればと2013年3月には立ち上げ時に協力したCSRスペース、プロミス心斎橋お客様サービスプラザにて他の住み開きを実際にしている人達と「住み開きサミット」という情報交換、交流の機会を始めたりもした。ただ「家を少し開いているだけ」なのに、不思議な高揚感がこの時の僕を包んでいた。（<https://namba.keizai.biz/headline/2455/>）



でも、この話が仮に「住み開き」としての表の「住み開き511」の話だとすれば「日常避難所」と

しての活動については少し違う面があった。僕は別にイベントを開催する場所が必要だったから「住み開き」を始めた訳ではなくて、むしろ、イベントをオープンに開催していく事で、この「住み開き511」という「マンションの一室」の認知度や信頼度をあげて、考えていたコンセプト通りに「日常」的に何かしら困っている人の一時的な「避難所」としての役割を果たしたかったからだ。

こちらは活動の目的上、今までソーシャルメディアやWEB上ではプライバシーに配慮して細心の注意をはらってきたつもりだが、当初はTwitterのみに限定して「困っている人なら”誰でも”来てくれていい」と毎日発信し続けた事で本当に不特定の様々な”一時的に避難したい位の日常的なトラブルを抱えている”方からのコンタクトがあった。しかし結論だけを言えば、僕の日常生活の中の限られた時間では十分にそれら全てに応えるにはやはり無謀で、修正をすぐに余儀なくされた。”誰でも”から”友人の友人まで”と言葉的には”わずか”でも”大きく”日常避難を受け入れる条件を修正したのだ。

それでも、名前は当たり前前に伏せるが「避難してくれた人達」と夜遅くまで、それぞれの悩みについて見返りを求めず何時間も（時には朝まで）語り合ってきた時間は「住み開き511」の「イベントスペース」としての表の顔とはまったく違う、言わば「駆け込み寺」的なWEB上ではわからない裏の顔で、僕に東日本大震災の被災地を訪れてからずっと抱えていた「何かをしなければ」という気持ちの拠り所となり、仮に悪意で考えると「いつトラブルを起こされるかわからない」自分にとってはリスクのある状態を「わかった上で」その中でも逆に僕に「無条件の善意で相手に向き合い続ける事」その大切さを感じさせてくれる時間となった。

「住み開き511」という挑戦を始めた事で、東日本大震災以降にずっと抱えていた無力感が表と、そして裏の両方で救われ始めていた。

変化（2013-2014）

確かめたわけではないが、変化を感じ始めた。「住み開き」が「住み開き提唱者」のアサダワタル氏の精力的な活動もありマスメディア等で頻繁に紹介されたり、この年のトレンドワードに選ばれるなどした事で、2013年の始めくらいから「住み開き511」に新しく”住み開きをはじめようと考えている”そんな人たちが頻繁に見学に来るようになりだしたのだ。

当初は僕自身も「住み開き」をはじめたい人のきっかけ作りの為に、前年に続いて今度は京都「つくるビル」で2回目の「住み開きサミット」を開催したりもしていたので、概ね好意的にその変化を捉えていたし「住み開き提唱者」のアサダワタル氏と違い、実際に毎日「住み開き」をし続けている立場としてできる限り親身になって相談にのるようにもしていた。

ただ中には明らかに「特定の目的のために」（あなたみたいに）家の一部を活用して副収入を得たいのだけど”あるいは”孤独死に備えて（僕は中年独身男性でもある）住み開きをしたいのだけど”そんな相談をする方達も増えてきていた。それはどうやら不動産会社の情報サイトや、住み開きは「孤独死対策に有効」的にテレビで紹介された事が原因のようだった、これがとても僕には居心地が悪く、違和感を覚え始めていた（余談だが、まだ世間では知名度が低かった住居のシェアリングサービス、Aiebnbの紹介イベントを511で開催したのもこの時期だ）

もちろん「住み開き」を始める事にはそういった経済的な面や社会福祉での効果もあるかもしれないし、各自が「住み開き」をどのような目的で始めたとしても、もちろん全然構わないと思う。ただ、僕がしている「住み開き511」は、副収入を得る事や、ましてや孤独死に備える事を目的にしていなかったもので、居心地が悪くなってきたのだ。少なくともそういった事を目的として来てくれる人に「住み開き」をしている先輩として向き合うのは誠実さを欠く気がしたし、正直、僕が「住み開き511」でしている「日常避難所」活動が同じように捉えられるのも耐えられなかった。

そんな「住み開き」自体の知名度があがってきたからこそその、必然的な”言葉としての消化”「住み開きとは」の定義づけなどが各所で紹介される中で僕自身は逆に「住み開き」の普及を積極的に広める役割は終わったと感じ始め（それは、そもそもアサダワタル氏の役割だと思うし）自然に前述の「住み開きサミット」を開催する事もやめた。

むしろ、「住み開き」それ自体への興味より「自宅だからこそできるイベント」を追求する事に関心ごとが移りつつあった。きっかけとなったのがWEB上で話題となった素麺屋さんの販促イベントも兼ねているのであろう「夏の秘密結社 フリーソーメン」（<http://freesomen.org/>）を大阪で紹介した事だ。

一見、冗談活動のようで、実際に「夏の秘密結社 フリーソーメン」を真面目に場所を借りて行おうとすると「不特定の人に食べ物を配る」という行為は実はかなりハードルが高い。ソーメンという飲食物を調理するスペースの確保や配る事自体の衛生面的な問題をクリアする事や、不特定の誰かに”もし悪意があったら？”そう考えるとイベント企画者としては悩ましい事ばかりだと実際にやってみて感じた。

でも逆に「住み開き511」という自宅マンションを活用した場所では、そもそも悪意のある人が”わざわざ”来る可能性も低く、また当たり前だが調理用のキッチンもあるので「何のハードルもない」事がかえて新鮮に感じたのだ。こうして今度は「自宅だからこそできるイベント」を追求する日々が始まった。

例えば「夏の秘密結社 フリーソーメン」のフォーマットをあえて意識した上で僕なりのアレンジを施し「誰かの選択肢になれば」と始めた「冬の騎士団 天ぷら騎士団」という活動もその一つだ。
(<https://templanight.jimdo.com/>)



もちろん「日常避難所」としての駆け込み寺的な活動も同時に続けていた。こちらでは深刻なものが多かった当初とは違い、気軽な相談、例えば社会人や学生さんの飲み会や勉強会の場所としての利用相談などが増える一方で、クラウドファンディングサービス「CANPFIRE」などでIT業

界で知られる家入一真氏と仲間たちが「現代の駆け込み寺」をコンセプトに全国で「リバ邸」という活動を始めた事で、そこを利用する人が同じような流れで”日常避難”しにくる事も増えていた。

こうした様々な変化が「住み開き511」内外で起きはじめていた。

別れと出会い（2014-2015）

マンションの屋上で大真面目に参加者全員で宇宙人を呼ぶ「そうだ 宇宙人、よぼう」とんかつを料理する音に合わせながら即興で音楽を奏でる「とんかつとDJ」など文字通り”わざわざ施設を借りるほどでもなく”一方で”借りるとしたら許可をとるのが実は難しい”「自宅だからこそできるイベント」に挑戦する日々がしばらく続く。（なぜかその事で？NHKの番組に出る事にもなった）

バカバカしくも楽しい時間。間違いなく僕自身も楽しんでいたが、今振り返ると、プライベートでは看護の甲斐なく実の父親を始めとして、次々と親しい親族達と死別する事が重なっていたこの時期は、何かしら心にぽっかりと穴が空いたような、そんな喪失感を埋めるのに必要な時間だったかもしれない。

そんなある日、待ち合わせの時間まで余裕があった僕は時間潰しも兼ねて本屋で立ち読みをしていた。その時に偶然に視界に入ったのが「元オウム真理教」の”アーチャー”こと松本麗華氏による「止まった時計」だった。



”オウム真理教か、懐かしいな。そういえば当時テレビでみたこの人、今何をしてるのだろう？”

1995年に起きた地下鉄サリン事件当時に大学生だった事もあり、同時代的な感慨もあり興味本位で手にとった、この「止まった時計」に気づけば引き込まれていた。なぜなら、この手記には松本麗華氏から父への想いが、決してうまくはない文章で、でもだからこそその誠実さを感じる文章で書かれていたからだ。そして僕自身も父を亡くし喪失感を抱えていたからこそ、直観的に感

じた。”ああ、この人は「元オウム真理教」ではなく「娘」として父親の事を誰かに話したいのだな”

でも同時に「だとしても」それは一連の事件で傷ついた人達の事を考えると「難しいだろうな」とも思った、僕自身が仮にどこかの「施設の人」なら、被害者感情に配慮して許可は出せないだろうとも思った。

”なら「住み開き」として「自宅」を開放し続けている自分ならどうだ？”思考の続きが予想外のブーメランになって自分への問いかけとして戻ってきた。”それに「自宅だからこそできるイベント」って、楽しいことだけか？思い起こせば東日本大震災後の行動として「日常避難所」を「住み開き」で始めた僕は、こうした「困っている人」の力になる為に始めたのではなかったのか？”

気づけば、本の最後に記されていたブログのアドレスから彼女に、しかし「それほど返事は期待せず」にメールを送っていた。”もし誰かに本の話をする機会を持ちたいのなら、うち（住み開き511）ならお引き受けできますよ”と。すると程なくして、まさかの返信が来た”ぜひ、よろしくお願いします”と。びっくりした。とはいえ、自分からメールしたにも関わらず、返事を受け取って、正直に言えば「怖かった」

メールを送った後から、周囲の人に相談したり、自分なりにネットに掲載されている情報を検索した「その時の結論」として「面識のない」彼女の事を100%確証をもって信用する事ができなかったからだ。最悪な場合、もしかしたら僕は「邪悪な宗教組織の布教活動」の片棒を「自分から」担ぎにいったるかもしれない（実際にそうだ。と友人にも警告された）そんな事すら考えたからだ。でも、やっぱり最後は「住み開き511」でこれまでしてきた「無条件の善意で相手に向き合い続ける事」その数年間で得た「自分の直感」を信じる事にした。

そして完全非公開で「住み開き511」で開催した松本麗華氏による「止まった時計」出版記念トークイベントが無事に終了し、その後は、彼女の希望で「普通の飲み会」を何人かの僕の友人、そして、彼女の知人の元オウム真理教信者の方々と一緒にテーブルを囲んで行った。社会では「悪とされる」そして罪のない人々を傷つけた事は「間違いのない」オウム真理教。だけど、それは「別にして」松本麗華氏が元信者の方達とまるで同窓会のように昔の事を懐かしそうに話す姿を眺めながら「この機会をつくって良かった」と心から思った。

同時に、このイベントを開催した事で初めて「新たに知った事」があった。関心をもってくれるのでは？と「若者の再出発」や「社会的弱者の救済」に取り組むNPO団体や宗教関係者に連絡をとる中で、一部の方から「会いたくもない。ましてや話も聞きたくない」「一体何を企んでいるのか？」などの反応をもらった事だ。（勝手に僕を”元オウム真理教信者”と決めつける人がいた事

には驚きを通り越して、ぽかんとした) その事で僕の中で起きた気持ちは”え？あなた達の言う「若者の再出発」や「社会的弱者の救済」に元オウム真理教信者や松本麗華氏は含まれないのか？”という関係者に対する素直な驚きと「不信」。そして”松本麗華氏、そして元オウム真理教信者の人たちはこうした（自分も含めて）「一方的な悪意」とずっと向き合わされてきたんだろうな”という僕なりの理解と「謝罪」だった。

この時まで僕は全然「知らなかった」から。見ているようでちゃんと「見ていなかった」から。

そして「元オウム真理教」の松本麗華氏は、この後に僕にとっては「松本麗華さん」（元オウム真理教）という存在となった。つまり、過去のことは「別として」このイベントを通じて”一生懸命に生きている、父親想いの一女性”という、新たな気づきをくれた事に僕が感謝する「大切な友人」の一人となったのだ。

この経験が大きなきっかけとなり「住み開き511」は「自宅だからこそできるイベント」として、この当時話題となっていた安保法案に反対する学生運動「SEALs」関西や福島原発から避難した主婦の会の集まりといった「発言しているのに、遠巻きにされたり、無視される」あるいは「公共施設や民間のスペースでは断られる」そんな方達にも自分の責任と判断で”場所を貸す”ようになった。

あらためて、一方的に決めつけて「良いか悪いかを勝手に判断する」のではなく、まずはその前に「相手の話を聴く」その事が全てにおいて必要だと思ったのだ。

気づけば2012年11月に「住み開き」を始めてから丁度3年目となった2015年11月末。この「住み開き511」という「日常避難所」をコンセプトした活動での出会いがきっかけとなり、「住み開き511」から徒歩圏内、より梅田の中心地から近い所に何人かと共同で新たなスペースを運営する事になった。”はちみつとフリーペーパー”という少々変わった組み合わせ、かつ木曜日しかオープンしないお店「はっち」である。

このお店がどうして出来たのか？に関しては別に「はっちの作り方」（<http://p.booklog.jp/book/117042/read>）で詳しく書いたので割愛するが、いずれにしろ「はっち」が出来た事で「住み開き」としての活動に関しても選択肢の幅が増える事に繋がった。これまでと違い、企画に応じて、あるいは相談事に応じてマンションの1室なので「なんでもあり」だが「はじめて訪れる」には人によっては多少の躊躇が生まれがちな「住み開き511」と、“食（はちみつ）と本（フリーペーパー）”と「なんでも」ではなく「一応の制約」はあるものの「誰でも参加しやすい」路面店でお店らしい「はっち」と使い分ける事ができるようになったのだ。

その事で2016年からは、花見をしながら公園に魔法陣を描く「511de魔法陣（円）」や、某料理番組を思い出させるような「究極vs至高 闇鍋頂上決戦！」などの「住み開き511」という「自宅からできるイベント」は相変わらず行いつつも、週に1回は「はっち」で養蜂家による「はちみつ業界の実は！』などの飲食業界を紹介する企画や「フリーペーパー研究会」という紙媒体の発行者を紹介する「お店だからできるイベント」を同時並行して行う日々が続き、「住み開き511」としての全体のイベント数自体は当然に減る事になった。

その一方で、かえって「日常避難所」としての「住み開き511」は、その本来の役割、匿名での”大雨で電車が動かず帰れなくなった人の受け入れ”や”一人では解決出来ないトラブルの相談”や”全国各地からの宿泊場所を確保出来なかった人の受け入れ”を静かに、そして余裕をもって果たす事が出来ていた。

そんな時に2016年4月、再び起きたのが熊本（大分）地震であった。発生をした当日は丁度「はっち」でイベントをしていた事もあり、あまり深刻に捉える事が出来ていなかったが、テレビをつけて大きな被害を受けた熊本城の姿を見た時は実家が熊本である事もあり、激しいショックを受けた。胸が張り裂けそうな気持ちになった。そしてまた自分への問いかけが始まった”今度はなにができるのだろうか？”



親族や親しい友人の安否確認を行いながら、余震が続く中で、まず一早く行ったのが（かつての東日本大震災の時と違い）この「住み開き511」への「避難民受け入れ」をFacebookやTwitterで熊本、九州方面に向けて表明する事、そして”雲隠れしてしまったくまモンをみんなで描く”Facebookページ「くまモン108」の開設及びチャリティー企画の「住み開き511」での開催（こちらは現在も熊本の復旧情報のリンク集として更新し続けている）そして、防災意識が高まっているからこそその大阪でも「できる事」として「夜の避難訓練」と名付けた防災、減災ワークショップを開催する事だった。

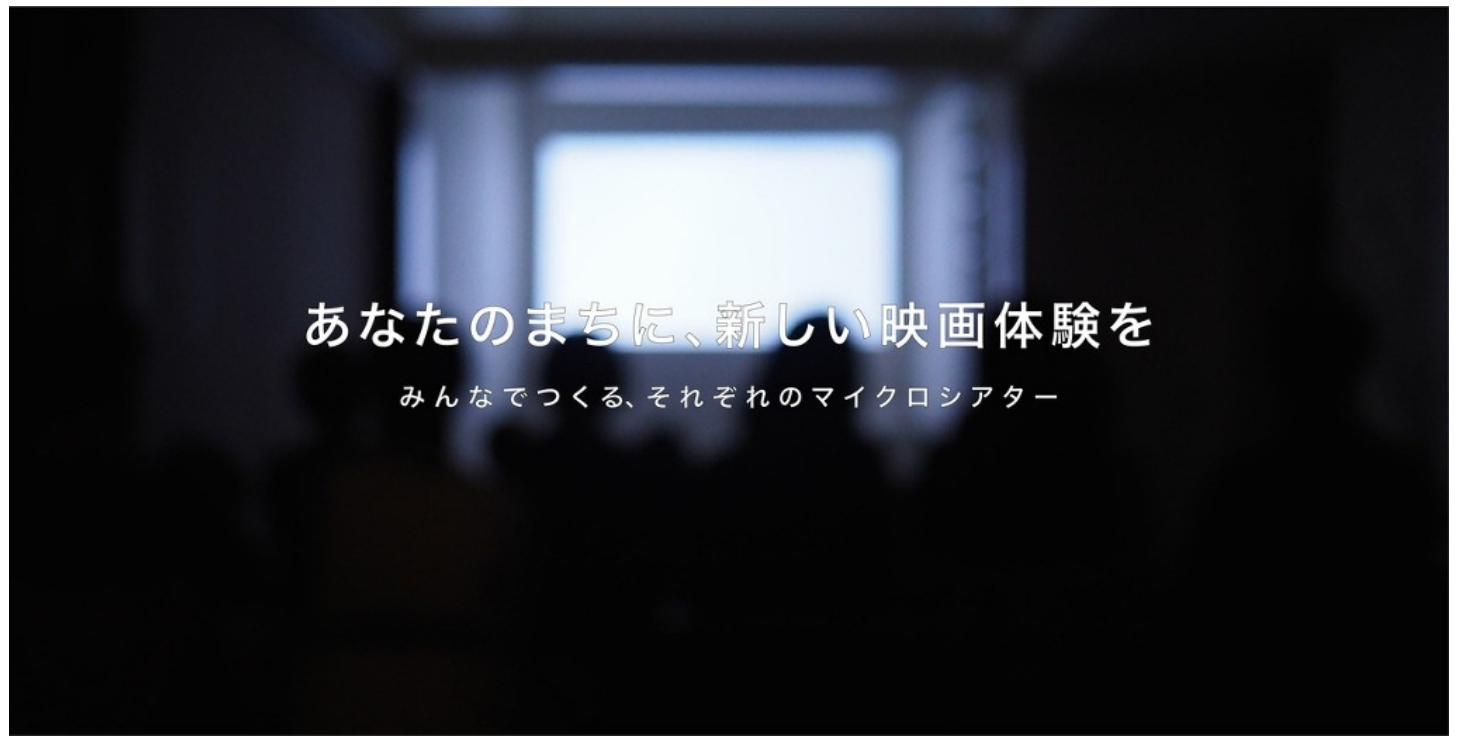
こうした事を行った事が今でも「正解」だったのかどうかはわからないし、「充分」であったかもわからない。しかし、以前「東日本大震災」の時に立ちすくんだまま何も出来なかった「あの時」と比べるなら（地震自体そもそも起きるべきではないと思うが）少しだけ一歩を踏み出す事が出来たのではないかとと思っている。

2016年7月には「住み開き」について、久しぶりに「住み開き」提唱者のアサダワタル氏と数年ぶりに対談する機会をもつ事が出来た。大阪市の生涯学習施設「いちようカレッジ」、そこが企画した”家でも会社でもない3つ目の居場所”「サードプレイスのつくりかた」をテーマにした連続講座にアサダワタル氏と一緒に登壇し、アサダワタル氏が提唱者として「住み開き」全般について、僕が「住み開き511」を事例紹介として紹介する。そんな内容だった。

「住み開き」をしているという事を2012年から始めて、のべ5000人以上が訪れる中で最早すっかり意識していなかった事、また「住み開き511」の活動を”イベントで誰かに話す”という事自体が久しぶりだったので、かえって新鮮であったと同時に、立場的に「住み開き」を推奨するような役割をしなければならなかったのには多少の息苦しさも覚えた。

何故なら、そこには様々な目的で「サードプレイス」という場づくりを考えている熱心な人達が集まっていた事もあり、彼らにとってはおそらく「住み開き」は既に”手段やツールの1つ”といった位置付けだろうと思ったからだ。その代弁者として「住み開き」を語るには僕のしている「住み開き511」は既に数多く存在する「住み開き」模範例としては少々特殊で、ちゃんと届ける事ができていなかったのではないかと考えたからだ。

そうした気持ちが自分の中でふと芽生え始めた事で「住み開き」を2012年からはじめて早くも5年目、そして「もう5年目」を迎えるからこそ、僕はそろそろ幕引きというか自宅を静かに「日常避難所」として誰かに「一時避難所」として提供するのはいくらも続けるとしても”「住み開き」をしている。”と殊更には名乗るのをやめる事を考え始めていた。（そうした決断が柔軟にできるのが「住み開き」の良さだとも思うから）



あなたのまちに、新しい映画体験を

みんなでつくる、それぞれのマイクロシアター

そんな時に知ったのが、2017年4月にリリースされたサービス「popcorn」（<https://popcorn.theater/>）という「誰でも小さな映画館をつくる事ができる」プラットフォームサービスだった。この”映画好きでもあり、自主上映会の企画もこれまでしてきた”僕にとっては画期的なサービスの普及のお手伝いを今度は「住み開き」の変わりにする為に、これまでイベントとしては「なんでもあり」を個人的には大事にしてきた「住み開き511」をあえて「マイクロシアター」という特定の「映画」というカテゴリーに落とし込むのに「上映会を頻繁に行う事で」新たにチャレンジし始めたのだ。（「本」については既に「はっち」という”本屋のふり”をした活動を始めていたので、棲み分け的に面白いかも？という意図もあった）

こちらは始めて、まだ5ヶ月と結論を出すには早すぎる気もするが、このサービスを活用して映画上映を月3〜4回のペースで行う事で、回を重ねる毎に「住み開き」ではなく、今度は「映画」作品自体に関心があって集まってきた新たな人との交流が始まっている。

そして引き続き当面は「マイクロシアター」として2017年9月現在、この「511」で”小さな映画館のふり”を続けようと考えている。

ここまで東日本大震災後に自分なりに考えたアクションとして2012年に「自然災害があった時、そこまで特別ではなくても何かしら日常生活においてのトラブルが起きた時の駆け込み寺「一時避難所」（日常避難所）」というアイデアをアサダワタル氏の提唱した「住み開き」として「住み開き511」で実現してきた日々を駆け足だが2012年から2017年まで綴らせていただいた。

その年毎に「印象に残っている事」を優先して書いている事もあり、紹介した年度の活動については時系列に多少の前後もあるが、そこはあえて笑って許していただけたらと思う。

そして、ここまで読み進めてくれた方に最後にお伝えしたい事は大きくは2つある。「住み開き」事例としての「住み開き511」、そして「日常避難所」としての試みを続けてきた「住み開き511」だ。（下の写真は2014年9月に訪れた宮城県、女川で活動するNPO対話工房さんとの交流機会での一枚。<https://www.youtube.com/watch?v=4k2FEESj0rY>）



「住み開き」の事例としては、これから「住み開き」を始めようとしている人には、何かしら頭で考えすぎるより、できる範囲内で無理なく「まずは始めてしまう」のをおすすめしたいと思う。（=いつでも終われると言う事もある）なぜなら「住み開き」はカフェやゲストハウスなどのいただいたお金への対価を提供しなければならない「サービス業」と違い、決して何かしら決まりがあるわけではなく精神的に「自由」だからだ。（前述のpopcornはそういった意味で誰でも、そしてどこでも2〜3万程度の「プロジェクターさえあれば」何とかできるので良いです）

そして、せっかく始めた事で「誰も参加者が来なかった」としても「それはそれとして」あまり気にせず、それよりイベントスペースとしての「住み開き」に拘るのではなく、他者に自分を開く余地がある”性善説”での相手をまずは信じる「態度表明」を「住み開き」を通じて不特定多数の誰かに無言でしている”と思って欲しい。それは僕という「自宅に他人を呼びたくない性分の人間」が「住み開き511」で個人的勇気で「自分自身を開く」チャレンジした結果として、頭で理解するよりも、そして言葉や数字で説明するよりも「精神的な豊かさ」をこの数年間感じているからこそ、強くお伝えしたいと思う。

「日常避難所」としては、今回はじめて言葉にして振り返ったが、その事で感情的になる事が沢山浮かんできた。一度「日常避難」してくれた事をきっかけにリピーターというか毎年、大阪で仕事がある度に泊まりに来る職人夫婦とはこの「住み開き」をしているからこそ付き合いが始ま

ったとも言えるし、それ以外にも時には海外からも見ず知らずの誰かが訪れてくる日々は昼間の仕事を終えて「まっすぐ自宅に帰る」その”日常的な行為”を別のものに変えてくれたからだ。とは言え、こちらはいわゆる「民泊」とは違い、より原始的でリスクを伴うので楽しい事もあれば辛い事も幾つかはあった（深刻なものではないが）Twitterで”日常避難所？川沿いの（防災的に）危険な地域でなに言ってるの？”と中傷されたり、一時的に受け入れて向き合った人から結果として理不尽な言葉をかけられたりした事もあるからだ。

ただ、それでも「微力」であったり、「無力」であったりしても、こちらの「日常避難所」としての活動はイベント的な「住み開き」以上に不特定の層が訪れて来るからこそ、僕にとって様々な学びの機会となった事も事実だ。だから、万人にすすめる事はしないけれど、自分の個人的なミッションとしては引き続き、今は「住み開き511」として、そしてこれからも「何かしらの形で」駆け込み寺の代わりを続けていきたいと思っている。

そして最後に、なぜこのタイミングで「住み開き511」の事を紹介しようと思ったのかと言えば、活動を始めた直接のきっかけが東日本大震災だったからこそ、震災後に出版されたいわゆる「震災後のアクション」として「日常避難所」を一括りにされるには、あまりに「小さな活動」で、今まであえて話すには”おこがましいのでは？”と思っていた事。そして、「住み開き」としては、ある程度何年間かの活動をした後でないと、提唱者のアサダワタル氏でもないし”失礼にあたるのではないか”？と思っていた事がある。

駄文であったとは思いますが、何かしらのきっかけで、ここまで読み進めていただいた方に、何かしらの参考になればと願いつつ、そろそろ「住み開き511」について語るのを終わろうと思う。

自宅のシェアリングサービス「Airbnb」でよく引き合いに出されるガンジーの言葉を紹介する「はじめに彼らは無視し、次に笑い、そして挑みかかるだろう。。だが勝つのは我々だ」最後まで読み進めてくれた方に、これまでの「住み開き511」の物語が重ねて何かしらの次の一步につながればと願う。

例え孤独でも、笑われても、傷つけられても。「だから」頑張れ。



「住み開き」 2012→

<http://p.booklog.jp/book/117227>

著者：田中 冬一郎

ワオンプロジェクト設立者／ファイナンシャルプランナー
／終活カウンセラー／素人作家。

目の前の誰かのセーフティネットになる事を目指し、
2007年にワオンプロジェクトを設立。他NPOのプロボノも

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117227>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト